

作業分散・省力化で水稲の規模拡大

注目の“初冬直播き栽培”



「導入する品種の幅も広げたい」と話す大馬さん

新潟県関川村で水稲約46haを経営する村上野新農業センターは、21年から初冬直播き栽培を取り入れている。同社代表取締役の大馬毅彦さん(50)は「経営面積の拡大に伴い育苗施設が逼迫し通常の乾田直播き栽培を始めた。春先の作業が回らなくなっていた。そんな時に初冬直播き栽培を知ったのが導入のきっかけ」と話す。

初年度は35haに始まり、22年度は1.2ha、23年度は2.5haと徐々に導入面積を拡大。今冬は育苗と経営面積の1割まで広がった。大馬さんは「春作業の負担が軽減され、収穫も10割当たり200kg前後と移植栽培ほどはと変わらない」と笑顔を見せる。

播種は11月中旬から12月上旬にかけて、気温が十分に低くなつてから行う。同社とともに実証を進める農研機構中日本農業研究センターの大平陽一さんは「播種が早すぎると越冬前に発芽し枯れてしまう。地域によって適期が異なるので注意が必要」と解説する。

播種量も地域によって異なるが、同県では10㎡当たり10〜15㎡が推奨

初冬直播き栽培導入前後の作業スケジュール(例)

月	10			11			12			1	2	3	4	5	6	
	旬	上	中	下	上	中	下	上	中							下
導入前													耕起・代かき	育苗	田植え	雑草防除
													耕起・代かき	育苗	田植え	雑草防除
導入後																

移植栽培の一部を初冬直播き栽培に置き換えることで、春作業の負担が軽減



①ひとほをすきこみながら行う直播き作業、②播種後代かき後のような状態に、圃場の写真はすべて「野新農業センター」農研機構中日本農業研究センター提供



「浅播きの力牛を握るの」と話す。同社は「春先の育苗や田植え不要に」と話す。

収量も移植栽培と変わらず 春先の育苗や田植え不要に

2026年、新たな法を迎えた。農業。刈り後の初冬に種もみを直播し、翌春に者の減少は依然としてとまる所を知らず、担い手の育成・確保とともに抜本的な技術革新が求められる時代に突入している。そんな中、近年注目度を増しているのが水稲の「初冬直播き栽培」だ。種が高まっている。

多くの品種で利用可能な技術だが、収穫後に明渠を掘るなど排水対策を行う場合は、早生品種の方が作業に余裕が生まれ、大平さんは「種子の越冬能力も高い早生品種『つきあかり』を県内で

全国農業新聞
NATIONAL AGRICULTURAL NEWS
2025年(令和7年) 1月1日 水曜日
農地を活かし 担い手を応援する 農業委員会ネットワーク機構
発行所 全国農業会議所
〒102-0084 東京都千代田区二番町908
中央労働基準協会ビル 電話 03-6910-1130
ホームページ https://www.naon.or.jp/shinbun
お申し込みは、お近くの農業委員会へどうぞ

迎豆つる春
グミアイ化学工業株式会社
1カ月平均気温
冬冬の日本海側の海岸には「波の花」と呼ばれる泡がよく見ら

全国農業新聞 令和7年1月1日(水) 1面
 ※この記事は全国農業新聞の許諾を得て転載しています。
 ※無断転載・複写を禁じます